

1. **認知症当事者の発信とは…**
『なった人』による
『まだなっていない人』のための
社会貢献

このような視点は、かつて聞いたことがなく、自分自身も考えるに至らず、私にとっては真新しい衝撃的なものでした。当事者による発信は望ましいことと思っていました。それは“当事者の発信＝当事者の望む社会ができること（ケアを提供できること）”という思いがあり、その思いしかなかったからです。

最近では、障害を持った方々からの発信が増えてきているように感じています。身体障害者の自立支援法成立に際しては、当事者集会も多く開催され車椅子に乗った方々が日比谷公園に集合する姿などを見かけました。この時は、新たな法制度に当事者の意見を反映させようという意気込みが（国が作ろうとしている制度へ反対しようという思いが）盛り上がった時期であったろうと思います。

そして、この頃の私は“当事者の発信＝当事者の望む社会ができること”であるから、いいことだなと思ったのです。

ですが、先生のお話をうかがい、自分がずっと支援する側でい続けるつもりであったことに気づきました。そして、認知症当事者からの発信を、まだ認知症になっていない自分に向けての社会貢献としてとらえたときに、その情報に対する印象ががらりと変わることも分かりました。これまでは当事者から発信される情報・要望ととらえていたものが、自分に向けての教えとしてありがたく感じられるようになります。自分が当事者となっていない今のうちに、たくさんの真実を教えたい。それを基に、より良い法制度・サービス体制を整えておきたい。それが将来の自分を支えるのだから…と。

人は、どうしても他者のためより自分のための行動を重視するものではないかと思えます。こういっ

た場合に、当事者の発言が将来の自分のためになる発言であると捉えることが出来れば、その発言はさらに重視され、必要とされるのではないかと思うので、この視点・印象の変化は非常に貴重なものであると思いました。

2. **発信することは難しいこと…**

かなり前のことですが『私の頭の中の消しゴム』という映画を見ました。記憶はかなりあいまいになってしまっていますが、認知症を発症する主人公はまだ若い女性でしたので“若年性認知症”を扱った映画だったのだと思います。道に迷うようになったことで認知症を自覚した主人公が、短期間のうちに失禁をするようになり、恋人の前から姿を消す。消息が分かったときには何も分からなくなって施設へ入っていた…というストーリーでした。

医療・福祉の世界とも、認知症や高齢者とも関わりのない多くの若者が観ていたことから、映画という形態で発信することは大きな影響力を持つものなのだと感心する一方で、認知症当事者は（自分は当事者になったことはないけれど）これとはきっと違う！という違和感。これだけは今も忘れられずに残っています。

わざわざ足を運ばなくてはならない講演会やシンポジウム、取材対象が特化されているテレビ番組は、その対象者に興味を持たない人が見ることは少ないものであると思います。それに比べて、ドラマや映画は主人公となる芸能人に人気があったり、ストーリーが恋愛仕立てであることで、多くの人が見るようになります。現に、『私の頭の中の消しゴム』も“若年性認知症”が云々ということなどは気にせず、泣けるラブストーリーとして観客が集まったのだと思います。

多種多様な人が目にする方法で当事者の姿を正しく発信することができたら、その影響力はとても大きくなると思うのですが、人集めにはプラスアルファのフィクションが必要となる。対して、完全なるドキュメントでは限られた人しか目にしない。

認知症当事者を含む当事者からの発信に対して、さらに多くの人々の目を向けるようにするためには一体どのような手段がよいのだろうか…と悩み始めました。